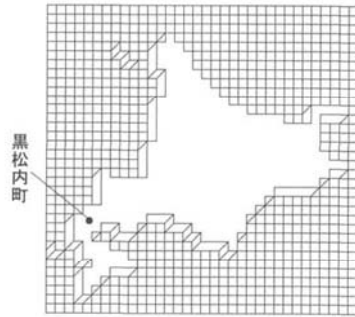


連載



あのマチ
・このムラ
・地域おこし活躍中

No.27

黒松内町の事例

「ブナ北限の里、酪農郷の再生をめざして」

◇町の沿革と自然

「黒松内」の由来は、アイヌ語「クル・マツ・ナイ」で和人の女のいる沢。かつて、出稼ぎの漁夫を慕ってきた女たちが船で北上中シケにあい遭難しこの地に滞留したのだろうか。美人が多いが、思いなしか面影に憂いを帯びているように感じられるのは、その由来を知ったせいかな。一昨々年、町は開村一二〇年を祝った。一八七九年（明治十二年）町の前身、旧三村の樽岸・

熱郇・黒松内に戸長（今で云う村長）が置かれた年から数えてとのこと。これより遡ること二〇余年、幕府は一八五六年（安政三年）に蝦夷地の開拓のため長万部から寿都にいたる黒松内山道を開通させており、以来この内陸の地は交通の要衝となり、宗谷に至る日本海沿岸道の開削に弾みがついた。

熱郇村・樽岸村の中の川地区が対等合併し三和村を設置、一九五九年（昭和三四・一・一）町制施行、同年（昭和三四・五・一）黒松内町に改称。後志支庁寿都郡の行政区に属し、管内一市一九町村のうちで一番南に位置しており、北海道内陸部への内玄関である。周囲町村には、管内の蘭越町・寿都町・島牧村、渡島支庁管内の長万部町、胆振支庁管内の豊浦町と、なんと三支庁五町村が隣接しているが、直接海には面して

はいない。地域の広がりには、東西二九・三km、南北一九・七km、総面積三四・四七km²であり、その四分の三が森林、耕地は約三・七千haである。長万部から寿都にいたる黒松内低地帯、町を流れる添別川等にはホタテ貝など海洋性の二枚貝の化石床が露呈しており、約七〇万年以前の太古の昔は海であった。この低地帯以南の植生は、ブナに代表される冷温帯の落葉広葉樹であり、低地帯以北

は北海道特有の針広混交林なのである。自生する「ブナの北限」として知られるこの地は、学術的にも貴重なところ。また、黒松内低地には寿都湾に注ぐ本流の朱太川があり、これに何本もの支流が山林をかきわけて注ぎ込んでいる。主なものでも熱帯・添別・黒松内川とあり、そして歌才川はブナ林が育む清流に恵まれており、一帯は多くの生物にとつての小宇宙を呈している。ここまで述べてくると、気象はさぞ穏やかなところだろうと想像されるが、思いの外厳しいのである。黒松内町は、東隣の蘭越町の盆地的気象と異なり、目名峠に象徴される町境をなす幌別岳、天狗岳から南南西に横たわる山陵と、西側は黒松内岳から北西にのびて月越山脈とに挟まれた低地帯の中央に位置するため、日本海と太平洋の双方の影響を受けている。春から夏にかけて内浦湾に発生する海霧

は南南東の風にのり内陸深くに入り込み、日照不足と低温をもたらし、時として冷害となる。風下の作開地区あたりは海霧は逃れるが風が強い。また冬は寿都湾方向からの北北西の季節風は、風上に当たる作開が地吹雪、風下の黒松内以南は弱風多雪となる。

年平均気温は七・二℃で、寿都町の八・四℃、蘭越町の七・四℃に比較して低く、五〜九月の平均気温は一六・一℃、一〇〜四月は〇・八℃である。土壌は粘質土が殆どを占めている。

このような気象風土から産業を見てみよう。町勢要覧から就業者一九七六人の構成をみると、第一次産業従事者は二〇%あり、内九〇%が農業従事者であり、漁業従事者はいない。因みに、第二次産業は二八%、その八五%は建設業、第三次産業は五二%と高く、このうち七三%がサービス業等で、社会福祉関係

施設の充実ぶりが目につくのも頷ける。二〇%が卸・小売・飲食業となっている。

◇後志農業の中の

黒松内町農業

黒松内の第一次産業を支える農業について表1〜3により、全道・後志支庁との対比において特徴を見ていく。表1において、一戸当たり耕地面積の大きさに示されるように、田が僅かにあり樹園に至っては数字に表れず、畑の八割方が牧草地であることから、冷涼な気象に対応した酪農と畑作が営まれていることが窺える。表2及び3から後志農業は、大消費地札幌市に隣接する地理的条件から、道内の樹園地の六割を占める果樹、水稲、馬鈴薯に代表される畑作、野菜そして畜産と多岐に亘っており、畑作園芸部門の集約化も進むなかで、一戸当たりの耕地面積が全道の約半分であるにも

関わらず、耕地面積当たりの生産農業所得は約一・五倍となっている。そのなかで黒松内町は、管内農業の形態と異なって耕地面積の七五%が牧草地であり飼料作物と乳肉牛飼養が基幹作物となっている。したがって農業粗生産は、その八割を畜産に負っている。

黒松内町は厳しい自然条件を抱えて酪農に期待を繋いでおり、一戸当たりの耕地面積で全道の約一・五倍を要しているが、耕地面積当たりの生産農業所得は全道の六割弱、後志の三割にも達していない状況を踏まえ、生産性の向上に向けて、役場やJAをはじめ関係機関団体が現在地域農業振興に真剣に取り組んでいるところである。

◇黒松内町の農業施策

平成十二年三月、町は「フロンティア21〜二十一世紀を拓く力強い黒松内農業を目指して

表 1 黒松内町農業の概要

項目	単位	全道	後志	黒松内町	
総土地面積	千 ha	8,345.22	430.55	34.54	
耕地面積	千 ha	1,187.00	37.60	3.68	
耕地内訳	田	千 ha	236.40	0.19	
	畑	千 ha	950.93	3.48	
畑内訳	普通畑	千 ha	413.80	0.73	
	樹園地	千 ha	3.63	0.00	
	牧草地	千 ha	533.50	2.75	
耕地率	%	14.2	8.7	10.7	
一戸当たり耕地面積	ha	16.4	8.5	24.5	
農家戸数	戸	72,315	4,441	150	
	うち専業農家戸数	戸	36,142	2,154	53
	専業農家率	%	50.0	48.5	35.3
農家人口	人	291,341	16,438	521	
総人口	人	5,726,184	268,086	3,613	

表 2 黒松内町農業の概要

項目	単位	全道	後志	黒松内町	
作付面積	水稲	ha	138,500	5,550	91
	小麦	ha	94,700	1,130	7
	ばれいしょ	ha	61,400	4,590	98
	大豆	ha	14,900	660	38
	小豆	ha	68,300	2,140	40
	てんさい	ha	70,000	1,790	31
	りんご	ha	949	479	-
	ぶどう	ha	1,170	871	0
	青刈とうもろこし	ha	37,700	657	192
	牧草	ha	580,400	7,770	2,800
生乳	t	3,633,723	35,495	10,479	
乳牛飼養頭数 (H12.2.1)	頭	842,714	8,318	2,414	
肉牛飼養頭数 (H12.2.1) 概数値	頭	426,036	5,781	2,870	
農業粗生産額	百万円	1,057,403	45,434	2,533	
耕種粗生産額	百万円	599,314	37,580	439	
畜産粗生産額	百万円	457,793	7,854	2,094	

表 3 黒松内町農業の概要

項目	単位取量	全道	後志	黒松内町	
作目	水稲	kg/10a	534	510	436
	小麦	kg/10a	317	123	229
	ばれいしょ	kg/10a	3,673	3,290	2,898
	大豆	kg/10a	269	248	232
	小豆	kg/10a	100	202	193
	てんさい	kg/10a	5,410	4,101	2,397
	りんご	kg/10a	1,401	1,355	-
	ぶどう	kg/10a	1,000	1,140	-
	青刈とうもろこし	kg/10a	4,851	4,749	4,828
	牧草	kg/10a	3,398	3,129	3,411
生乳 (H12) 乳検成績	kg/頭	8,336	8,001	8,267	
生産農業所得	農家一戸当たり		5,341	3,831	3,828
	耕地 10 a 当たり		33	51	19
	専従事者一人当たり		3,024	2,101	2,507

注：表 1～3 しりべしの農業 2001（データ編、H13.3 後志支庁農務課）
 北海道統計書（第 108 回、道総合企画部統計課）
 平成 12 年検定成績集計結果（H13.6、十勝乳検連・十勝農協連）より作表

く」と題する目標年次が平成十六年度の「黒松内町農業振興計画」を樹立。その見開きに谷口町長のことばがあり、町の農業の取り組みと決意が語られている。一部分を紹介してみよう。

「この計画では、『フロンティア21』をキーワードとして、経営を意識した農業の原点からの見直しと体質の強化を図り、二十一世紀に向けての食料の安定生産機能や多面的機能の十分な発揮という国民的期待に先導的に応えうる、活力と魅力ある黒松内町農業・農村を再構築する



黒松内町農業振興計画



役場 まあたらしい分庁舎
産業課もここに

ことといたしました。

町といたしましても、この計画がただ単なる目標に終わることなく、黒松内農業の再生に向けての第一歩となり、より効果的に農業振興の各種事業が実践できますよう、取り組んで参る所存であります。」

さて、この連載のNo.27「黒松内町」の原稿のマス目を埋めるハメになった筆者であるが、平成十一年から複数の課題に関しプロジェクトの一員として黒松内町に何度となくお邪魔をし、大方の酪農家の玄関に辿り着け

るようになったことがその理由らしい。黒松内とはなかなか縁が切れない、いや縁をきりたくない良いマチである。ただ、一言不満めいたことがあるとすれば、この酪農家はファーム名を掲げている農場が大変少なく、表札自体めったとお目にかからないことである。五万分の一の地図を片手に約束の時間までに訪ねあてなければならず、玄関で「〇〇さんのお宅ですね」と声をかけ、「ハイ、そうです」と聞いて安堵の胸を撫で下ろしたことがしばしばだった。

「黒松内町農業振興計画」を実際に推進する町のスタッフを紹介しよう。町長の決意についてはいしましたが紹介した。総務課長の増田氏は前産業課長であり、この農業振興計画の企画立案に手腕を発揮されるなど農業施策について大変造詣が深い。産業課長の佐藤氏は民政畑を経験され町の施策全般に明るいパワフ

ルな方。政策主幹の福田氏は産業課のスポーツスマンで、昨年の春から道農政部からの派遣職員として赴任、気軽な相談役に徹している。この度の取材においても全面的な協力をいただいた。産業課の辣腕係長こと下村氏は、産業畜産行政に精通し農家をくまなく掌握しておられ、調査においても協力をいただいたが、農家の信頼も厚い。

産業課は農政係、畜産係、土地改良係と特産品開発室（後述する町の特産品加工センターの「トワ・ヴェール」、展示即売施設店舗の「トワ・ヴェールII」の管理運営、ちなみにtoit vertとは「緑の屋根」の意）それに農業委員会事務局を加え、二二名ほどの職員で町の産業関連の事務から現場対応まですべての業務をこなしているのだから驚きである。職員は住民にとって何が必要かを判断基準に、町長の代理として即断即決を心

表4 主要作目の計画目標年（平成16）における生産性向上等の指針

作目	耕種部門 作付面積 ha	生産量		労働時間		生産コスト	
		kg/10a	現況対比	hr/10a	現況対比	円/10a	現況対比
水稲(モ子)	80	450	114	22.8	97	72,707	95
馬鈴薯	116	3,500	113	24.3	97	121,091	95
大豆	37	270	120	9.9	97	53,678	95
小豆	40	240	117	11.8	97	49,596	95
小麦	20	420	175	2.2	96	37,054	95
てん菜	40	5,600	117	14.5	97	68,006	95
大根	25	5,500	122	50.6	97	391,021	95
長ねぎ	2	2,500	124	89.6	97	312,000	95
牧草	2,850	4,000	117	-	-	-	-
青刈とうもろこし	200	6,000	123	-	-	-	-

畜産部門	1頭当たり搾乳量 kg		経産牛1頭当たり hr		乳脂率 3.3% 換算生産	
	分娩間隔 (ヵ月)	1頭当たり hr	1頭当たり hr	繁殖・肥育牛1頭当たり		
酪農	7,752	102	93.6	93	51	98
肉牛	12.6	96	60.0	95	186,300	97
酪農			肉牛			
乳用牛総頭数(頭)	2,621	110	肉用牛総頭数(頭)	2,935	98	
うち成牛頭数	1,582	102	うち専用種	2,920	99	
うち経産牛頭数	1,486	107	うち繁殖牛	1,177	98	
生乳生産量(t)	11,519	105	うち肥育牛	1,677	96	
			うち乳用種	15	50	

資料：黒松内町経営・生産対策推進会議「地域農業マスタープラン」平成13年4月
現況対比の基準年は平成11年実績

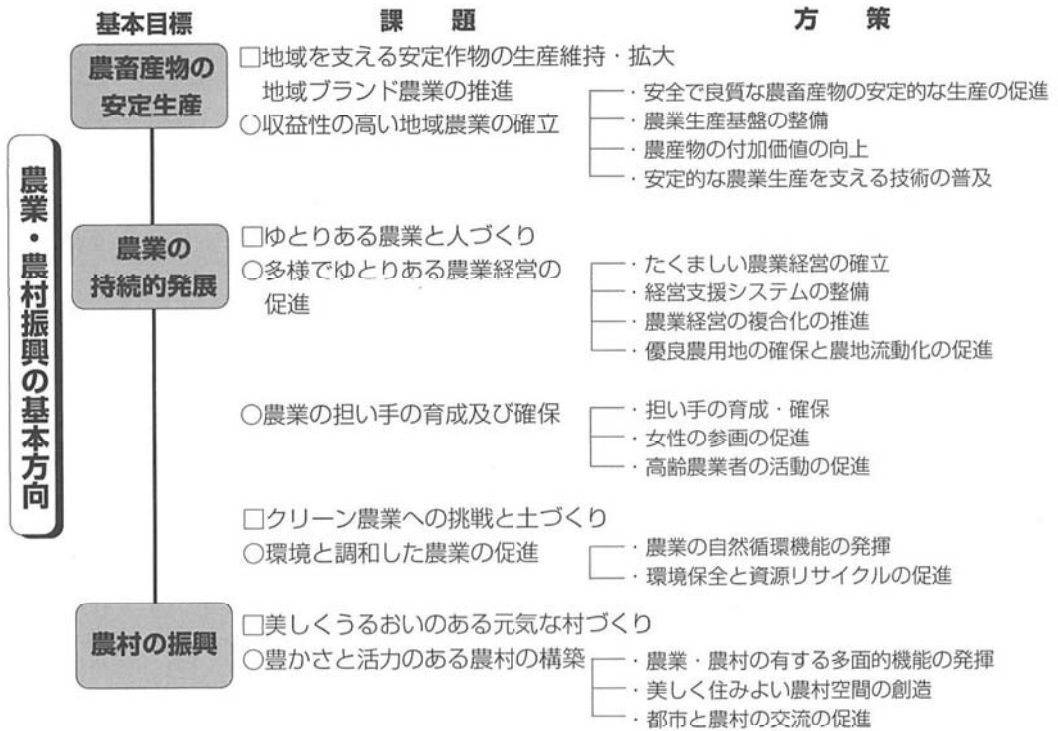
掛けていくとのこと。その結果であろう、役場に親近感をもつ町民の声を多く耳にした。都市住民には到底味わえない住民感覚であり大変羨ましく、同時に裏方の皆さんのご苦労を思うのである。

本筋に戻そう。この農業振興計画では、農業概況を次のように総括し、課題と方策を示している。

基幹作目である酪農部門は飼養農家数、飼養頭数、生乳生産量の減少からみて停滞から低下傾向を辿っている。酪農部門は一九八五年、地域の農業粗生産額のおおよそ四九%を占めていたが、九八年には三七%へと低下しており、酪農の衰退が地域の経済に大きな影響を及ぼすことが懸念される。このような背景には、

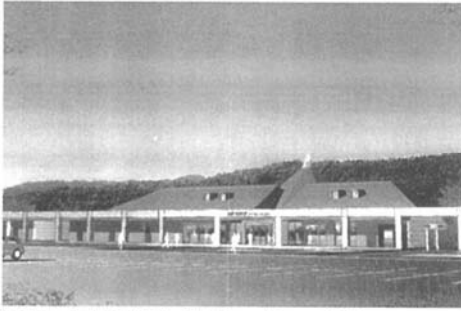
- 模拡大を図ったものの、乳価の低迷により償還金が経営を圧迫して再投資を阻んでいること、後継者不在などから離農が続いていることがある。このような現状を打開するためには
- ①酪農経営に対し生産者から経営者としての意識改革、自立精神と優れた経営感覚を養うことが必要不可欠であること。
 - ②労働力、技術力、資本金などからバランスのとれた経営規模と合理的な生産方式の選択に徹すること。
 - ③農作業受託組織（ファーム・コントラクター）の活用による農作業の効率化、機械導入に伴う償還金、修繕費、減価償却費などの生産コストの低減、過重労働力の解消を図り、土地、労働、資本の生産性を高めること。
 - ④遊休地や家畜ふん尿の利用により良質な自給粗飼料の給与量を高め、生産コストの低減

【計画の組み立て】



と乳質改善に努めること。
 ⑤法人化、協業化により強
 じんな経営体質への転換
 を図ること。
 また、稲作、畑作、肉用
 牛経営においても農業生産
 を取巻く環境が厳しくなっ
 ていくことは同様であり、今
 後、消費者のニーズに合わせる
 品質、安全性、生産「ストの
 一層の低減や、生産者から
 経営者への意識の転換と経
 営条件を助案し、経営の三
 要素（耕地面積、保有労働力、
 資金力）のバランスのとれた
 経営への転換を早急に進め
 る必要があることは酪農経
 営と同様であるとしている。
 目標年次における主要作目
 の生産目標は表4のとおり。
 計画の組み立て（振興計
 画書より転載）は、表にあ
 るように、三つの基本目標
 と五つの課題に一六の方策
 をもって構成されている。

ここに示される一六の方策に
 ついての具体的取り組みは、紙
 面の制約から紹介できないので
 あるが、実にきめ細かな「施策
 の展開方向」が指し示してある。
 これらの「施策の展開方向」は
 相互に関連しているのであるが、
 課題からトピックスに取り上げ
 て紹介してみたい。
 ○課題：収益性の高い地域
 農業の確立から「農畜産物
 の付加価値の向上」
 地域の農業が安定的に発展し
 ていくためには、有機栽培など
 安全性や品質による差別化、鮮
 度保持、安定出荷や流通加工へ
 の一層の取組みによる付加価値
 の向上、生産者の顔が見える多
 様な流通形態の拡大、地場農畜
 産物の加工流通への積極的な取
 組みなど、さまざまな取組みを
 通じて、消費者や需用者のニ
 ーズに的確に応えた農畜産物の生
 産・供給によって、ブランドの



特産物展示販売施設「トワ・ヴェールⅡ」



特産物加工センター「トワ・ヴェール」

確立、有利販売、付加価値の向上を目指すとしている。

地域の特産物は加工製品との関係でみると、酪農畜産物では生乳と牛・豚、稲作は耐冷性の「白鳥モチ」、馬鈴薯・小豆に小麦、ブドウがあがってくる。

施策の一つとして特産物手作り加工センターの加工技術の向上と新製品の開発による地場農畜産物の利用拡大を進めている。

その具体策の一つとして、特産物加工センター「トワ・ヴェール」は、役場の北西約3kmの牧草地の小高い丘に緑の屋根を載く城のような佇まい。製造のスタンスは、余分なものは加えない「素材」を活かし本物の味にこだわる。アイスクリーム、チーズにハム、ソーセージを製造。自慢のチーズアイスクリームなど四種の開発を手掛けた乳加工室の吉竹チーフは、そのこだわりを「自然を愛しつつける黒松内だけ

らこそできる」のだと。製造ラインを見学後は、展望の利く二階の軽食レストランで味わい楽しむこともできる。

○課題：多様でゆとりある農業経営の促進から「たくましい農業経営の確立」

地域の農業者には、「生産者から経営者へ」という意識の下で新たな活力が芽生えつつあり、農業経営の生産性の向上を促進するとともに、収益性の高い優れた経営の確立を図ることに努める一方で、地域の農業を担っていく経営主体の発展を促すため多様な経営形態の展開によって、経営の質的向上を図るとしている。農村景観を生かし地場の農畜産物やその加工製品の販売、ファームインやレストラン、観光農園などに取組む経営の多角化を推進している。

特産物展示販売施設「トワ・ヴェールⅡ」は、国道5号沿い

の黒松内町玄関口に位置する。ここは特産物の展示・即売に、町の自然と文化の情報発信基地としての道の駅「くろまつない」を兼ねて賑わっている。少し勝手違うレストランではあるが、地元の素材を活かすこのレストランにパン工房も併設されており、焼きたてのパンが楽しめる。工房には、こだわりのパン造りに励む佐藤さんがおり、100%黒松内産ベーグルなど新商品の開発に奮闘している。

アスパラガスやねぎ、馬鈴薯などの即売に、売店を覗けば、前述の酪農畜産加工製品の他、モチ米と北限のブナ林から湧き出る清流とで醸し出されるモチ吟醸酒「横のせせらぎ」やシリーズの純米酒「にこり酒」「横すく」シリーズの焼酎など銘柄が豊かであり、またブドウはセイベル種を「横のささやき」など、それぞれ委託醸造されたものが並んでいる。その他、天然アル

カリイオン水は「水彩の森」、牛乳は「風薫る」の商品であったり「ミルクまんじゅう」や「ぶな林最中」「鮎の飯ずし」など地元の商品多数がある。

○課題：農業の担い手の育成及び確保から「担い手の育成・確保」

地域農業の多様な経営形態の展開とその担い手の育成を図る

ためには、農家の子弟はもちろんのこと、就農ルートを通じて多様な人材を確保・育成に努めるとともに農家の嫁・婿不足の解消に機会と交流の場を設けるなど、あらゆる手立てをつくし努力するとしている。

イベントを紹介しよう。六月下旬の「ブナ・ウォッチング」、冬には雪の上を歩く「かんじき

ブナ・ウォッチング」がある。共に歌オブナ林を散策する自然体験で自然派にはたまらない。冬のイベントといえば二月下旬の「かんじきソフトボール大会」、かんじきを作り続ける渋谷さんの功績をたたえて始まった。昭和六十三年に第一回大会といつても僅か四チームで行われたそうだが、今は全国大会となり四〇チームもの参加がある。



かんじきブナウォッチング

真夏は七月下旬の「ビール天国」、町営球場で開催される黒毛和種の焼き肉パーティーで、函館や札幌方面からの大勢の家族連れで賑わっている。また、秋は九月上旬の「鮎まつり」、朱太川ほとりでの炭焼き鮎は最高だそうだ。

「ブナ北限の里」をキャッチフレーズに交流のための施設はかなり整備されている。「歌オ自然の家」、「黒松内温泉ぶなの森」、「歌オオートキャンプ場」他、各種スポーツ施設や「ブナセンター」などの研修施設がある。

さて、就農援助条例に基づく新規就農者を支援する優遇措置の一部を紹介しておこう。

資格条件

ア・個人経営／年令二〇才以上六五才未満

イ・共同経営／年令二〇才以上三〇才未満三名以上の方が一定の経営条件を充たすとき、



かんじきソフトボール大会



ブナセンター

- ① 奨励金／農地保有合理化事業等の制度における貸付または利用権設定の期間内の五年間にかかる賃借料の二分の一以内。
- ② 経営自立安定補助金／農業関係経営資金などの制度事業費の三・五％（限度額三、〇〇〇千円）
- ③ 利子補給／農業関係経営資



自然体験学習宿泊施設 歌才自然の家

金に対し、経営開始の属する年度から、五年間二・五%を超える部分（補給金算定基礎限度額は、ア 五〇、〇〇〇千円、イ 八〇、〇〇〇千円）

○課題：農業の担い手の育成及び確保における女性や高齢者から「女性の参画の促進」

地域社会の活性化に大きく貢献する農村女性の役割は、正し

く評価していくとともに、都市と農村の交流など活動への参加を促すことや農村女性のネット化の推進を図り、その役割が十分発揮できる環境づくりにも努めるとしている。この実現の取組みの一つに前述の地場の特産加工品づくりや産地直販などに取組む農村女性グループの活動などがあり、これらを支援し推進している。

○課題：環境と調和した農業の促進から「環境保全と資源リサイクルの促進」

食料の安全性や環境問題への国民の関心が高まるなかで、農業生産活動が環境に与えているマイナスの影響を解消するための方策については、農業生産廃棄物の適正な処理に努め、地域の自然環境、生態系と調和した持続可能な農業の確立を図るとしている。この実現化の一つの柱に、家畜ふん尿について耕種

農家との広域連携による循環利用や土壌菌などを利用した急速堆肥化施設と無臭化技術の推進に取り組んでいる。熱帯地区に高速堆肥製造センター（生産堆肥はJAようお願い管内で広域利用）が平成十六年に操業予定。建設予定地のそばの仮実験施設でこの夏、関係機関の技師が堆肥製造テストを繰り返しおられた。この施設と運用システムの検討は、現在大詰めに入ったと聞いている。自家の農場から生堆肥の持ち出しはなしにはならないが、原料供給者は必要量の堆肥還元の利用を必要経費とともに見込む心構えを先ず持つことである。「家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」の規制をクリアするうえに、大切な時間を自分

のものにできるのだから。また、施設はコントラクターの拠点にだつてなりうるのだし、自分達の宝ものとしてぜひ活かした

いものだ。それが豊かな酪農郷の実現につながると私は思う。

○課題：豊かさや活力のある農村の構築「都市と農村の交流の促進」

農業・農村が有する多面的機能の発揮に対する国民の期待を背景に、グリーン・ツーリズム、体験農園、山村留学などの都市と農村の交流活動がますます活発化している。こうした農村のもつ多面的機能の重要性について、この地域は「早く認識し、自然とのふれあいと景観の保持に真摯に取り組んできており、町民の意識の高さを感じる。」

北限のブナは、一九二八年（昭和三年）に国の天然記念物の指定を受けた。幾度も襲いかかったブナ伐採の危機は、このころある町民の熱意で回避され、原生の姿を今に残しているのである。このブナがとりもつ縁で「二十世紀スイス村構想」を策定し、



天然記念物 歌オブナ林

そのためには自分で
 売る力も必要」と語っ
 ている。また、脱サラ
 し訓練学校で木工技
 術を修得、八年間修業
 のち、九七年兵庫県
 から移住した西馬夫
 妻。廃校の小学校に新
 たな文化を発信する
 工房「WEST HOR
 SE」を経営、手づく
 り家具の制作販売の
 傍らブナセンターで

木工教室を開き、地域との交流
 を積極的に行っている。一方、
 こんな山奥にと思われるとこ
 ろだが、添別ブナ林を窓望でき
 る喫茶店、名前も「ファーガス
 ポイント」を、九四年にオーブ
 ンした柳沢夫妻がいる。その二
 年前に札幌から移住、きつかけ
 は真冬の歌オブナ林を歩くイ
 ベント「かんじきブナウオッチ
 ング」で、移住はその時のポラ
 ンティアガイド、酪農家でブ
 ナ林の保全に尽力されている

□□取材をとおして□□
 ここに紹介したのは、ほんの
 一部にすぎない。「施策の展開方
 向」の一つ一つの「日も早い実
 現こそが、黒松内町の農業の再
 生ひいては町の繁栄に繋がるこ
 とと祈念して止まないのである。
 レポーター

特別研究員 横山 瑛

ミルクとシルクを推進する四国
 は愛媛県野村町と平成五年に姉
 妹町に。黒松内町を訪れる自然
 愛好家は年間約九万人、そのピ
 ジターを町は観光客と呼ぼすに
 「交流人口」と呼ぶ。移住組もあ
 らわれており、町は宅地・住宅
 対策や移住者等定住対策・雇用

対策・新規就農対策等々に力を
 入れて「住んでみたくなるまち」
 「住んでよかったまち」を目指し
 た地域づくりを進めている。
 移住組を二三紹介する。中の
 川地区に就農し畑作農家とし
 て馬鈴薯の産直で頑張ってい
 る田代夫妻、九二年（平成四年）
 東京からの平成入植
 者である。「実際に食
 べてくれる人の顔が
 見える農業がしたい。



ミニビジターセンター

富田氏の力添えによると聞い
 ているが、自然もさることなが
 ら人物同士互いに意気統合し
 たのであろう。「静かにゆつく
 り憩える場」が店のスタンス。
 結構若い人達が訪ね来るよう
 である。すぐ近くに草原の丘に
 つづくブナ林が、入り口にはミ
 ニビジターセンターがある。四
 季折々に「また訪ねてみたいと
 いう心情」を覚えたのは私だけ
 ではあるまい。佇まいに自然に
 湧く心情こそは、これからの町
 おこしを考えるととき大切な要
 素ではなからうか。